

『未知へのフィールドワーク』――

ジリアン・ピア著 鈴木聡訳

ダーウィン以後の文化と科学』

東京外国語大学出版社 二〇〇九年十一月

本書は、ケンブリッジ大学教授ジリアン・ピア (Gillian Beer) による *Open Fields: Science in Cultural Encounters* (Oxford: Oxford U.P., 1996) の、本学教授鈴木聡氏による翻訳である。ピアの著書は世界的にもイギリス文学の研究者たちに親しまれているが、日本では一九九八年に『ダーウィンの衝撃――文学における進化論』(原題 *Darwin's Plots: Evolutionary Narrative in Darwin, George Eliot and Nineteenth Century Fiction*) が翻訳されており、科学的言説としてのダーウィニズムはたえず注目されている。日本でもジリアン・ピアの名前はすでにそれなりの知名度を獲得しているのかも知れない。九四年には日本でも丹治愛氏による『神を殺した男――ダーウィンと世紀末』が出版されており、本翻訳が当初予定された通り一九九〇年代後半に出版されていたとすれば、よりタイムリーな話題になっていたかも知れないと思うと、いくぶん残念な感じがしなくもない。

というのも、九〇年代後半は一般および出版面における経済面その他での受難の時代といってもよく、とくに学術的な図書の出版の可能性が危ぶれ、八〇年代から九〇年代初頭まで続いた出版と研究の動向がおそらくは様々な要因からある種の断絶を余儀なくされた時代だったからである。文芸創作についてもおそらく

同様のことがいえ、確か柄谷行人氏だったかがある文学賞の選評で、二〇年間なにもなかったかのように作品が書かれ始めているというような感想を漏らしておられたことを記憶している。かつてポール・ド・マンの盟友であり、『日本近代文学の起源』の著者、日本の数少ない脱構築批評の実践者のひとりであった柄谷氏がそのように述べたとすれば、旧来のリアリズム的・ロマンティズム的な文学の制度が回帰し、他の傾向を圧したというように解釈することができるはずである。

本書を読む際に、日本語での出版を遅らせた原因ともなったであろう、そうした回帰への願望を念頭に置いてみるといいかも知れない。というのも、科学という言葉、そしてダーウィニズムという言葉が含意するのは主として進歩主義的なイデオロギーとの共犯関係であり、科学と呼ばれるもの一般が、通常の科学信仰や、現在では古風ともいえる進歩主義の絶対化を暗黙の了解としている共同体や国家のイデオロギーと共鳴し、起源や体制への回帰願望を喚起しがちだからである。

ダーウィニズムに関していえば、丹治氏が上記の著書でダーウィンを「神を殺した男」として紹介していることに端的にも示されているように、ダーウィニズムは伝統的なキリスト教的イデオロギーの真実性を否定し、あらたな歴史的真相を示す実在論的な知の二形態とされかねなかった。一般には現在でもその状況は変わらないのかも知れない。ポストモダンリズムやポストコロニアリズム、文化理論など一般が、対抗文化あるいは対抗的言説の集合体として、進歩主義や科学的厳密性、より高い真実性を含意し、しばしばより古典的な学問的厳密さを標榜しうるのと同様である。ピアが本書第二章で論じているトマス・ハーディの古典『帰郷』(原

題 *The Return of the Native*）における優越した共同体としてのイングランド同様、科学的理論や新しい理論は真実性において他に勝り、何らかの帰帰を肯定する磁場としてもしばしば機能していることに對する注意喚起とも受け取れる警告が、本書には満ち満ちている。

たとえば本書第一章と第二章では、ダーウインの非西欧人にたいする矛盾した態度や身体的反応などが書簡などの引用とともに詳細に検証・議論され、エドワード・サイード以降のイギリス文学研究の方向性を決定づけたいわゆるポストコロニアリズムの観点からダーウインその人とダーウインの著作が再検討される。それ際に「ビアが、本書では「土着民」と翻訳されている「naive」という名詞を、西欧対非西欧という常識的な観点からではなく、そのどちらでもない定義不可能な言葉として異化し、あらたな観点から提出していることに注目するべきだろう。

また、ダーウインニズムと一言でいつても、それが何を指し示しているのが明瞭ではないことをあらためて指摘してくれていることも本書の美点だろう。ビアの代表的な著作とされる *Darwin's Plots* も、同様にダーウインの著作のテクストとしての特質に着目し、真実性という根源を見いだしそこに帰帰することができない言説の集合体として、『種の起源』などを十九世紀のハーディやディケンズ、ジョージ・エリオットなどによるリアリズム小説などのフィクションと並列してその特質を記述しようとする試みだった。ダーウインニズムが十九世紀イギリスの芸術における諸言説に大きな影響を与えたことを認知しながらも、ビアは本書でもダーウインの著作が同時代的な他のテクストの起源となつているととらえる視点を自然化することを拒否し、たとえば「波動理論とモダニズム文学の勃興」と題された第十三章においては、リアリズム

や心理主義的リアリズムを同一性や真実性のよりどころとするどころか、上記「土着民」と同様に、同一性を持たない「逆説」として記述する。

文学作品におけるリアリズムは逆説にもとづいている。「リアルニズム」という用語は、みずからが近似値であり、補助であることを表明するものである。それは、「他者」を模倣するとともに、それに張り合おうとする試みなのだ(439)。

ビアが根源的であり常識的でもある課題に取り組み、かつ正確な観察を述べている個所は他にも多くみられ、保守・革新といった通常の二項対立的な読解の立場を意識しつつ乗り越えてゆく意思と技量を感じさせる。「人間」と他者、リアリズムにおける主体と他者、形態の同一性と他の形態との関係などが、観察者の「類比(アナロジー)」に発するとダーウイン自身が述べていたことをビアが指摘している箇所(192・193)などは、通常の進歩主義的な科学主義的イデオロギーとダーウインとが共犯関係にあったわけではないことを証だてると同時に、本書もポストモダンやポストコロニアリズムなどと総称される諸言説を特権化する立場に立脚していないことの証左となつている。そうであれば、原著タイトルの「Open Fields」とは、そのように範疇化され決定された同一性と、それにとつての未知の他者とが出会う場ではなく、そうした範疇化を免れた諸言説があらためて出会いなおす可能性を秘めた場を指し示しているに違いない。一九六〇年代後半以降の重要な論点(たとえばミシェル・フーコーが取り上げた両性具有者のアイデンティティについての議論)を踏まえたうえで、科学と非科学、既知と未

知との区分が解体されることによつて、新しい越境的・侵犯的研究の豊かな可能性が呼び込まれることを本書はあらためて教えてくれる。

新しい学の形態が旧来の科学主義や実在論を乗り越えようとした結果生まれた学問の諸範疇が、ダーウィンその人を一例とする知的な主体の絶対性を肯定しないことなどはあらためて指摘するまでもないにしても、それらの学の新しさが古典的テキストや理論を再検討することによつて再確認されるものであることが忘れられそうな時などに、是非本書が紐解かれるべきだろう。

大部かつ難解な原著を、テリー・イーグルトンを始めとした多数の御翻訳を出版されている鈴木聡氏による達意の訳文によつて読めることは、読者にとつて大きな幸運である。

(加藤雄二)